

2021 年度 総合研究所特別研究員 研究活動報告

氏名	佐伯 慈海
研究テーマ	常啼菩薩求法譚の研究
研究概要	<p>1. 『六度集経』の「常悲菩薩本生」と初期の般若経の常啼菩薩求法譚を、比較検証することで大乘仏教興起の様相を探る。</p> <p>2. 仏伝と常啼菩薩求法譚の対照表を作成する。その上で、この求法譚がどの部派の保有する仏伝を下敷きにしたかを探る。</p>

1. 研究活動の概要と研究成果	<p>大学図書館に送本や文献複写を依頼して先行研究の調査に時間を費やした。具体的には山田龍城『大乘仏教成立論序説』、干潟龍祥『改訂増補 本生経類の思想史的研究』、外園幸一「仏伝経典の形成過程について」、『増谷文雄著作集』5、6 『平川彰著作集』3、4 望月信亨『浄土教の起源及発達』、『梶山雄一著作集』2、4、6 などである。その結果以下の視点を得た。『六度集経』「常悲菩薩本生」と常啼菩薩求法譚は共通する原型となる物語が存在すると予測されているが、この原型となる物語の一つはジャータカ（常悲菩薩本生）として現れ、一つはアヴァダーナ（常啼菩薩求法譚）として現れた。大乘仏教（菩薩）の出発点を形成するものと考えられている燃灯仏授記の話がジャータカとして作られたという事情からすると、「常悲菩薩本生」の方が先に作られ、これが大乘菩薩の修道の根拠となったのではないか。その後、大乘菩薩は既存の部派仏教からの批判を乗り越え大乘仏教を確立していく。この時期に必要なものは自らの修道や信仰が正しいものであるという強い自覚である。この自覚を得るためには大乘菩薩の求法が主題となるアヴァダーナが必要となり常啼菩薩求法譚が作られたという流れを想定した。常啼菩薩求法譚と仏伝を比較すると釈尊の成道に至るまでの内容と合致する。ところが平川彰氏や外園幸一氏が指摘するように、律蔵における仏伝は律制定のいきさつを述べるために必要とされており、それらも多く断片的である。従って釈尊の成道に至るまでの内容も決して多くない。これに対して「成仏に至る過程は如何なるものであったか」ということを物語るのが仏伝経典であり、大乘的思想の展開と相俟って発展した。この仏伝経典と常啼菩薩求法譚との比較対照が必要と考えている。</p>
2. 今後の課題	<p>今年度は論文や学会発表の成果なく特別研究員の資格を失うことになる。今後は在野の研究者として空の論理、三昧という実践を備えた『八千頌般若経』に、釈尊成道に至るまでの仏伝を下敷きに作られた常啼菩薩求法譚が付加されたことの意義を『大阿弥陀経』『般舟三昧経』『阿閼仏国経』といった他経典との関わりにも注意して掘り下げたい。</p>